

はじめに

米国の美術館は、設立当初より「教育」をミッションの中心に据えるところも多く、その活動は日本の美術館に大きな影響を与えてきた。筆者は現在、学校教育に連動させた所蔵作品の鑑賞教育プログラムの共同研究「註1」を進めており、その一環として、米国の六つの美術館の現地調査「註2」を行った。訪問先では、NIB(幼稚園から高校生対象のギャラリートークの見学、あるいはそれらを想定したトークのデモンストレーションの体験、各館の活動概要と関連情報の収集、教育担当者との意見交換などを行った。

ギャラリートークの位置づけ

どの美術館でも鑑賞学習の基本となっているのは、作品解説ではなく、「Inquiry based」(探求型)のギャラリートークである。このトークは、時間をかけて作品を観察し、進行役が学習者の興味・疑問・解釈を引き出していくことに特徴がある。また今回、ほぼ全ての美術館で、作品情報(または知識)を、適切なタイミングで教えているということを確認した。

グッゲンハイム美術館 シャロン・バツス

キーの、小学校高学年を対象にしたトーク・デモを例に挙げよう。ピサロの風景画「註3」の前で、「何に気がきましたか?」とトークを始め、参加者の観察と気付きを促す。皆の解釈が「どこにでもある田舎の午後の風景」だと落ち着きかけた時、シャロンは歴史的背景や作者に関する情報をピンポイントで与え、「産業革命で失われた」とある田園風景を惜しんで描いたもの」だという、より深い解釈につなげていった。この情報提供は、この学年が歴史を学んでいることが前提になっている。同じ作品でも対象が小学校低学年であれば、音や匂いの連想ゲームで詩を作るなど、別のアプローチがとられることになる。情報提供の判断は、「いつも、どのタイミングで、どれを出そうかと、頭の中で蠢いている」とシャロンが言うように、進行役の腕が試される所である。

ニューヨーク近代美術館(MOMA)で受けた、ジェシカ・バルデンホファーによるトーク・デモでも、情報が簡潔に与えられていた。MOMAのウェブサイトには、トークの指針として、① observation(観察)、② description(詳述)、③ interpretation(解釈)、④ connection(身の回りのものへの関

連付け)と四つのポイントが示されているが、③の解釈を深めるために、的を射た情報提供は有効であると感じた。ジェシカによると「情報を与えるタイミングについては、メトロポリタン美術館(MET)やホイットニー美術館との間でも合意に達している」とのことである。

八〇年代にMOMAから発信された鑑賞教育の手法「VTS (Visual Thinking Strategies)」では、子どもの批判的思考力を育成するために作品情報は与えないことになっている。日本はこの影響を強く受けており、トークで作品情報を与えるべきか否か、与えるならばいつどのように等、美術館でも学校でも結論が出ていないところが多い。この点で、エデュケーターや教員養成で指導的立場にあるブルックリン美術館アリソン・デイの、「我々は(トークの手法について)さまざまストラテジーを持っており、VTSはそのひとつに過ぎない」との見解は参考になる。

とはいえ、すべての美術館が同一の見解を持っているわけではない。フリック・コレクシオンのリカ・バンハムは、「エデュケーターは質問を多発すべきでない」と、最近の傾向に警鐘を鳴らす。トークには、打ち解

けた「カンバセーション」、質問と応答による「ディスカッション」、その中間の「ダイアログ」など、いろいろなスタイルがあり、何よりも鑑賞者の自由が保障されることが大切という。実際、リカによるトーク・デモでは、リカから一度も質問が寄せられないのに対話が深まっていくという得難い体験を味わった。

エデュケーターとドーセント
美術館でギャラリートークを担っているのは、多くの場合、有償の契約エデュケーターか、無償のドーセントである。どちらが対応するかは、館によって、また対象者によって異なる。

トークの実演を見て採用されるエデュケーターは、自分でプログラムを組み立てることができる専門知識と経験を持つ。MOMA教育部には十一人のエデュケーターが配され、複数の美術館を掛け持ちする人もいる。グッゲンハイムやブルックリンも、児童生徒へはエデュケーターが対応する。一方ドーセントは、美術館が提供するガイドラインをもとにトークを行うボランティアである。ボランティアの長い歴史を持ち、莫大な数の学校来館を受け入れ

るMETやワシントン・ナショナル・ギャラリー(NGA)では、ドーセントが児童生徒へのトークの大部分を担う。ハイディ・ヒニシュが率いるNGA教育部では、七十名のドーセントが年間約二万五千人の児童生徒へトークする。NGAドーセントの座右の銘は「ステージの中央ではなく傍らに立つ」、つまり学習者中心の探求型トークに徹することであり、そのための理論と方法を、彼らは二年間の養成研修で学ぶ。

学校教育とのつながり

児童生徒をギャラリートークで受け入れる際の流れと要点は、METのウィリアム・クロウによると次のとおりである。まず、教員がウェブサイトから申し込む。その際、トークのテーマを「コミュニティ」、「アイデンティティ」、「イスラム文化」など



「具体」展開中のグッゲンハイム美術館でトーク・デモを受ける調査チーム。手前右側が学校教育担当ディレクター。

から選択する。テーマは、ナショナル・スタンダード(全美教育基準)、あるいは州のスタンダードで定められた学年別のカリキュラムを反映させて、美術館教育部が作成する。いわばテーマは、所蔵作品を学校教育に繋ぐ連結器の役割を果たすものといえる。申し込みが受け付けられ、担当ドーセントが決まると、ドーセントはガイドラインに従ってテーマにふさわしい作品を三つ選び、補助ツールやアクティビティを資料室で準備する。ガイドラインや補助ツールの使い方は養成研修でも学ぶが、ドーセント用の非公開サイトでも確認できる。この仕組みによって児童生徒は、学校のカリキュラムに沿って鑑賞できるようになっている。

教員向けの資料や教材も豊富に提供されている。ウェブサイトには授業案やパワーポイント資料が掲載され、トークのノ

ウハウを動画で学ぶことができる。

教員向けの研修は、単発のものから連続のものまで種類が豊富だ。平日の夕方に、飲み物や軽食付きで教員レクチャーを開催する美術館は多く、気軽に参加できる。

本格的な研修としては、ブルックリン美術館が六日間かけて実施する「ティチャーズ・インステイテュート」が知られている。美術以外の教員にも開かれており、ニューヨーク市教育委員会の認定により、教員の職階向上のための単位が与えられる。

マンハッタンの四つの美術館が、毎年七月第二週に共同開催する「コネクティング・コレクシヨンス」は、MoMA、MET、グッゲンハイム、ホイットニーを一日ずつ周り、近現代美術の所蔵作品を授業で使えるようにする教員研修で、全美や海外からも参加者が集まるほどの人気がある。

そのほか、グッゲンハイムの「Learning Through Art」や、NGAの「Art Around the Corner」など、美術館と学校を行き来する「複数回訪問プログラム」が存在するなど、学校教育へのサポート体制は全般的に強力である。その背景には、学校予算の削減や教員資格の厳格化という公教育の見直しがあり、それらを補う機関として美術館は期待されているのだといえる。美術館運営上も、教育事業は今後ますます重要視されていくことだろう。

おわりに

調査を通じて、今の米国美術館における鑑賞教育の基本的な考え、組織のあり方、学校連携の仕組み、ナショナル・カリキュラムの反映、教員研修、ウェブサイトの有効利用などが明らかにになった。

最も印象に残ったのは、美術館教育のゴールやガイドラインを明示し、あらゆる機会を捉えて理解者を増やしていこうとする、担当者たちのオープンな姿勢であった。ドーセントを含めると一〇〇人を超えるような大所帯を切り盛りしていくためにも、助成などの外部資金を獲得するためにも、明示と情報共有は必須である。熱心であるとともに戦略的でもある、米国の美術館教育部門であった。

(企画課主任研究員)

註

1 平成二十四―二十六年度基盤研究(B) 24300315「美術館の所蔵作品を活用した鑑賞教育プログラムの開発」(代表:二條)

2 平成二十五年二月二十五日―三月五日。大高幸のコーディネートによる。同行者は他に、上野行一、奥村高明、寺島洋子。訪問先は、グッゲンハイム美術館、ニューヨーク近代美術館、フリック・コレクシヨ、ブルックリン美術館、メトロポリタン美術館、ワシントン・ナショナル・ギャラリー、PS49Q(ニューヨーク州立クイーンズ第四十九小学校)。

3 カミーユ・ピサロ《エルミタージュの丘、ポントワーズ》一八六七年。